

## 「平庭の麓から」

文責：久慈市立山形小学校 校長 角谷 隆章

学校+保護者+地域=子どもの健やかな成長

「学び高め合う子」、「心豊かな子」、

「強くたくましい子」の育成をめざして

# 【SOSには、意見挟まず耳傾けて】

今年夏ごろの毎日新聞でこんな記事を目にしました。

厚生労働省の人口動態統計で、岩手県内の2020年の人口10万人当たりの自殺者数の割合を示す「自殺率」が21・2人と、6年ぶりに全国最悪に落ち込んだ。自殺者数は前年より6人増え256人だった。19日に開かれた県自殺対策推進協議会で報告された。

さまざまな事情があるとはいえ、何とも悲しい気持ちになります。特に、学校現場で毎日子どもと接している教員という立場の人たちは、“子どもの命”は、何が何でも守らなければならないという強い使命感を持っています。事故であれ、災害であれ、自殺であれ、なんとか命だけは守りたい……。子ども一人ひとりには、計り知れない可能性があるのです。言うまでもなく、子の親たるもの、自分の子どもに対する思いは、他の誰とも比較できないほど、とても深いものがあるはずです。

「子にまさる宝なし」です。保護者(家庭)、地域、学校で手を取り合い、子どもの健やかな成長を支えていきましょう。改めて、よろしく申し上げます。

さて、先月の日本教育新聞で、中央大学人文科学研究所・客員研究員の高橋聡美氏が書いた文章を目にしました。ひと頃より落ち着いてきたとはいえ、まだコロナ禍の中にいます。我々教職員のみならず、保護者の方々も、子どもの声を聞く際の参考になると思いましたので、紹介させていただきます。(以下抜粋)

子どもの自殺増加は、必ずしもコロナ禍が原因ではなく、コロナ禍以前から続いていました。近年、SNSの普及で世の中は急速に変化し、コミュニケーションの在り方も変わりました。多くの子どもは、現実世界とネット世界の両方に顔を持ち、日常生活を送っています。直接的に嫌みを言われたり、物事を拒否したりする機会が減る一方で、SNSで「誰か」に刃を向けることも容易にできてしまうのです。

「最近の子どもは打たれ弱い」と言われますが、むしろ、複雑で変化の速い社会の中、よく耐えていると思います。複数の世界で生きることが、自殺の要因でもある「生きづらさ」になるのです。学校では明るく元気な「陽キャ」の子どもが多くが生きづらさを感じているということも、私たちは注意していかなければなりません。

これまでの自殺予防教育はSOSの出し方、いじめ対策、命の大切さを教える道徳的な授業が中心でした。しかし、子どもがSOSを出しても、受け止め方に問題があれば、「相談しなければよかった」と逆効果になります。まずは大人がSOSの受け止め方を習得する必要があります。SOSの受け皿を用意した上で、SOSの出し方を教えるといった段階的な教育が必要です。また、命の大切さを教えるよりも「あなたが大事」というメッセージを伝えることの方が重要です。「折れない心を育てる」ことが自殺予防教育ではありません。SOSを出せる環境があると伝えていくことが大切です。折れない心を育てようという風潮が相談しづらい雰囲気をつくっているように感じます。

自殺予防教育は小学校3、4年生ごろから始められます。例えば、良い言葉だけを使って、互いを紹介する「他己紹介」では、良い言葉を使った側も言われた側も、嫌な気持ちになることはありません。ワークを通して、言葉が心に与える影響について知ってもらえることが出来ます。

自殺予防教育はストレスや心の病の対処など、ライフスキルに関わる内容も含んでいます。これらのことを10代のうちに知っておくと、社会に出てからも、それが生かされ、自殺予防につながります。

子どもたちからSOSを出された先生は、いきなりアドバイスをしたり、「良い」とか「悪い」をジャッジせず、ありのままにその状況を聞いてあげてください。どんな気持ちかを聞き、子どもの情景を見せてもらってください。教師にできることは微力かもしれませんが、無力ではないと思っています。 (了)

少々、心にずしーんと来る内容だったかもしれませんが、次はガラリとかわって、思わず「うふふ」と笑顔になれるお話を。(「夜、眠る前に読むと心が「ほっ」とする50の物語」より抜粋)

タレントの関根麻里さんのエッセイ『上機嫌のわけ』に、お父さん、つまり関根勤さんが自分をどのように育てたかという裏話が出てきます。これがなかなか痛快なのでご紹介します。

まだ麻里さんが幼かった頃、関根勤さんはよく麻里さんに絵本を読んでくれたそうです。でも、そこはあの関根さん。普通には読みません。たとえば『桃太郎』。「昔、昔、あるところにおじいさんとおじいさんが住んでいました」と、最初の1行目からボケをかまします。当然、麻里さんは「おじいさんとおばあさんでしょ」とツッコミを入れます。すると関根さんは「あっ、ごめんごめん」などと言いながら、今度は「川からドンブラコ、ドンブラコと流れてきたものを拾ってみると、なんと花咲かじいさんのお尻でした」とまたまたとんでもないボケを入れる。「どうして桃太郎の話に花咲かじいさんが出てくるのよ！」と麻里さんがツッコむ。関根さんのボケは、その後も、桃から生まれた子の名前を、おじいさんが「ロドリグスにしよう！」と言ったり、「桃子ちゃんにしよう」と言ったりと延々と続く。

そのボケに対して、幼い麻里さんがいちいちツッコむという繰り返しがネバーエンドで続くのです。

麻里さん曰く。「とにかく、笑いの絶えない家庭でした」

そして、麻里さんは、そうしたボケへのツッコミを経験することで、「自然とツッコミのコツを覚え、笑いのセンスが磨かれた」とお父さんに感謝しているのです。関根さんは、麻里さんへ「ユーモアのセンス」の英才教育をしていた……のかもしれませんが。

この「ユーモアのセンス」って、子どもの頃に身に付けておかないと、誰かの冗談で皆が笑っている時に「今の話って、どこが面白いの？」と真顔で聞くザンネンな大人になりかねません。子どもが育つ過程で、「ユーモアを解する大人が、ひとりでも近くにいるかどうか」はとても重要なことだと思うのです。

ちなみに関根勤さんは、麻里さんが「理想の男性は高田純次さん」と言っているのを知った時、「オレの教育は間違っていなかった」と喜んだそうです。では、最後のもう一つ、麻里さんの子ども時代の思い出。

麻里さんがお父さんと「かくれんぼ」で遊んだ時のこと。麻里さんが鬼になり、となりの部屋へお父さんを探しに行くと、なぜか関根さんは隠れもしないで部屋の中に平然と座っている。それを見た麻里さん。「えっ？」となっていると、関根さんはたったひと言、こうつぶやいたそうです。「銅像です」

関根さん、最高！こんなお父さんに育てられたら、嫌でもユーモアがわかる大人に成長しますね。